

書評: Bempéchat, Paul-André (2009): *Jean Cras, Polymath of Music and Letters*. Surrey, England: Ashgate. 569p.

鈴木晃志郎\*  
Koshiro SUZUKI

I. はじめに

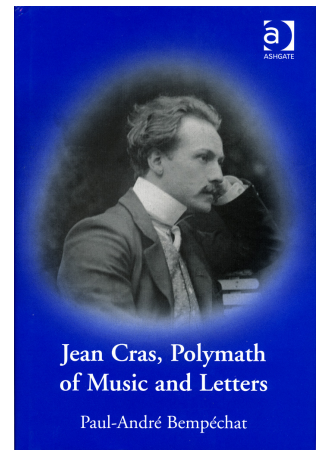
本書は、フランス近代の作曲家ジャン・クラス (Jean Emile Paul Cras)の生涯を紹介した初の本格的な評伝である。著者のポール＝アンドレ・バンペシャールは、マンハッタン音楽学校、ジュリアード音楽院でアルチュール・バルザムとフェリックス・ガリミールに室内楽を、ナディア・ライゼンベリにピアノを師事。ブライン・マウル大学のイザベル・カゾー (Isabelle Cazeaux)に音楽史を師事したほか、パリ第4大学 (ソルボンヌ大学)で、音楽史をマリー＝クレール・ベルトランド＝パチエ (Marie-Claire Beltrando-Patier)、比較文学をピエール・ブルナル (Pierre Brunel)に学んだ音楽史研究者。2002年から、ハーバード大学ヨーロッパ音楽研究センターでピアノ奏法および音楽史の客員講師を務める傍ら、ピアニストとして活動を展開しており、斯界で最も定評のある基礎資料ニューグローブ音楽辞典の新訂版が公刊される際にはジャン・クラスの項目を担当した第一人者である。

2009年によりやく刊行された本書は、1995年に書簡集を通じクラスの人となりを知って以降、足かけ15年に及ぶバンペシャールのクラス研究の集大成であり、管見の限り世界でただひとつの、信頼に足るクラスの評伝である。フランス近代の音楽史を学ぶ者にとって、本書の登場はひとつの壮挙であった。恐らくはその認知度の低さゆえ、日本語の書評が書かれる機会はこの場においてなく、それだけでも本書を解題し、国内の音楽学および関連分野の研究者へその公刊を知らしめることには応分の意味があると考えた。

ただし、掲載誌の主たる関連領域が観光学であることを鑑みると、音楽史に関心をもつ者以外にとって、本書の含意は解題なしには理解し難いと想定される。そこで、本書の紹介にあたっては敢えて長尺な書評論文の形を取り、ツーリズム研究における本書の含意を解題することに努めたい。

1.1 ツーリズムと音楽

先進国が軒並み低成長時代に入り、ポスト生産主義的傾向が強まるに従い、農村地域では農村空間の商品化に代表される「農村再編 (rural restructuring)」が進み、都市域では芸術文化政策を通じて地域社会の潜在力を高める「創造都市 (creative city)」の概念



が注目を集めるようになった (矢部 2005; 佐々木 2001)。このような動きは、オルタナティブ・ツーリズムのひとつである文化観光 (cultural tourism) や遺産観光 (heritage tourism) のもつ潜在的な役割を飛躍的に高めた。

Hollinshead (1988) によれば、民俗的伝統や工芸、民族的な歴史や社会的慣習、祭祀などのソフトな観光資源も、コミュニティの遺産 (community heritage) として広く観光客にとってのアトラクションとなりうる。農村において、生産される商品作物のみならず、農業体験などを通じた“田舎らしさ”の享受が重要な意味をもち、ニューオリンズがジャズの町として不動のブランド価値をもつように、文化観光や遺産観光においては、マス・ツーリズムに比べて経験としての記号消費の意味合いが濃い。このことは、文化・芸術表現のひとつである音楽においてもいえる。

カントリー・ミュージックをとりあげた Kong (1995) は、カントリーのもつ“田舎らしさ (rustic authenticity)”が、聴き手に対して、古き良き時代や風景の中で繰り広げられたシンプルな生き方への郷愁を誘う象徴として機能しているとした (p. 8)。同様に、プレスリーゆかりのメンフィスにあるグレイスランドは、夏季には“聖地巡礼 (pilgrimage)” 目的の観光客で、一日 5,000 人を集客する (Gibson and Connell 2007, p.173)。広い意味で、音楽もまたメディア誘発型観光の一形態であり、観光客のアトラクションとなりうる存在なのである

\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1  
e-mail: mapping@tmu.ac.jp

(鈴木 2009)。

## 1.2 音楽におけるリージョナリズムと近代

ツーリズムと音楽の関係は、既往の研究でも多方面から論じられている(e.g. Gibson and Connell 2005)。しかし、多くはイベント観光学の一ジャンルとしての音楽祭についての分析や、特定の場所がもつ集客効果、主としてポピュラー音楽の生成過程における社会的・文化的文脈の分析などである。Gibson and Connell (2005)による Music and Tourism は、斯界の研究動向をまとめた、管見の限り初の本格的な成果であったが、Annals of Tourism Research 誌上で同書を書評した Butler(2006)は、音楽とツーリズムの関係を概説した同書の意義を讃えつつも、その内容に若干の不満と失望を表明し、理由として(1)ポピュラー音楽のもつツーリズムへの効果を強調する一方、クラシック音楽のそれを正しく反映できていないこと、(2)オーストラリアの事例が多く紹介され、また映画と音楽の関係に混乱がみられること<sup>1)</sup>、(3)幾つかの主要文献が欠けていることを指摘している。

このうち(1)は、Gibson and Connell を含む多くの研究者に見過ごされがちである(e.g. Grazian 2004) が、ツーリズムと音楽の研究において重要な示唆が含まれている。それは、特に近代音楽史において、グローバリズムとナショナリズムやロカリティの関係を議論することの重要性である。

ポピュラー音楽において、グローバリズムとナショナリズム、ロカリティの関係について考察を加えた研究としては、英国マンチェスター(カルチュラル・インダストリーズ・クォーター)とシェフィールド(ノーザン・クォーター)を事例として、ポピュラー音楽のグローバル化に対して実施される地域レベルの文化・芸術振興策を紹介した Brown *et al.*(2000)などの例がある。しかし、クラシック音楽(史)の研究において同様の考察をした実証的な研究例は、管見の限り存在しない。Butler の指摘は、はからずもツーリズムと音楽の研究におけるポピュラー音楽偏重のもつ隠れた問題点を明らかにしたといえるだろう。

良く知られるように、音楽における近代化は、一面でナショナリズムの勃興と深く関わりがあった。ハンガリーではゾルターン・コダーイやベーラ・バルトークが、イギリスではヴォーン＝ウィリアムスやアーネスト・モーランが、自国に眠る音楽的遺産としての民謡の価値に気づいて精力的な蒐集活動を行い、スイス出身のエルネスト・ブロッホはユダヤ民謡の、ジョルジュ・エネスクはルーマニア民謡の旋律をとり入れた

作品を書いた。

フランスにおいても状況は同じであった。バッハ以降の調性音楽としてのクラシックの歴史は、ベートーヴェンやモーツァルト、ブラームスらドイツやオーストリアの音楽家たちによって作られた歴史でもあった。1871年、前年から続いた普仏戦争の敗北という状況を背景に「ゴール人(フランス人)のための音楽」を掲げる『国民音楽協会 (Société Nationale de Musique)』が創設され、フランスにおける音楽的ナショナリズムは黎明期を迎えた。創設者であるパリ音楽院声楽科教授ロマン・ビュシーヌとマドレーヌ教会正オルガニストだったカミーユ・サン＝サーンスを中心に、セザール・フランク、ヴァンサン・ダンディ、テオドル・デュボワ、アンリ・デュパルクら多くの賛同者たちの手でドイツ音楽を超えた“フランスらしい”音楽が模索され、やがてシャルル・ボルドらによって民謡蒐集も始められた(Duchesneau 1997)。

やがて、彼らの作り出した音楽的土壌を苗床に、クロード・ドビュッシーやモーリス・ラヴェルらのような、全く新しい音楽語法を駆使する作曲家たちが現れ、1909年に『独立音楽協会 (La Société Musicale Indépendante)』を創設。すでに長老格となった国民音楽協会の作曲家たちとの確執を尖鋭化させたのは、それからわずか38年後のことである。クラスが生きたのは、パリを舞台にナショナリズムとポスト・ナショナリズムのイデオロギーが渦巻いた時代であり、後述する「第3のグループ」に属する多くの作曲家はこの状況下で地方へと下り、各々の地域に根ざした音楽表現(ロカリティ)を探求していった。こうした時代背景の下で、土地土地の音楽がいかに意味づけられ、フランスにおける音楽の近代化という社会的状況の下で構造化されていったのかを、ツーリズム研究の視座から組織的に論じた研究は見あたらない。本書がツーリズム研究においてもつ隠れた意義は、ひとりの作曲家の生涯を通して、近代フランス音楽史におけるリージョナリズムの勃興について考証するうえでの、またとなりソースが得られる点にある。

## II. クラスの生きた時代

本書で紹介されるジャン・クラスは、1879年5月22日ブレスト(Brest)に生まれ、1932年9月14日生地で没したフランス近代の作曲家である。クラスはごく近年まで、作曲家としてはほとんど認知されてはならず、1996年、フランスの音楽レーベル“スカルボ”の音楽監督を務めるジャン・ピエール・フェリーが、ヴ

アイオリンのマリー＝アニック・ニコラとともに、初めて作品集を制作(Skarbo: DSK4941)して紹介するまで、国際的にはほぼ無名の存在であった<sup>2)</sup>。著者の述懐によると 1993 年暮れ、最初にクラスを彼に紹介したのもフェリー氏だったというから、今日の再評価の契機を作ったのはフェリーその人だったといえるかも知れない。

クラスの生きた 19 世紀末から 20 世紀にかけてのヨーロッパは、芸術を含む生活上のあらゆる局面で、過度な工業化への反省と、人間性の回復、あるいは脱西洋化が唱えられた。工業化の進行による創造性の枯渇を厭い、社会の再生は人々が生活の中で用いるもののフォルムの真正性によってのみなされるとの理念から、中世のギルド精神、自然界のモチーフへの回帰を主張するイギリス起源の「アーツ・アンド・クラフツ運動」(中山 2000)はその典型で、造園(ハミルトンほか 2002)や建築・都市計画(小林ほか 1992)、室内装飾(島田・川向 2004)など、様々な分野へと波及した。アーツ・アンド・クラフツ運動は、フランスではアール・ヌーヴォー(Art Nouveau: 新芸術)と呼ばれる表現様式に採り入れられ、デザイン・ソースとして浮世絵を始めとする東洋絵画の動きの描写や動植物の形態模写の手法が新鮮な驚きをもって迎えられるようになった時代でもある(石倉・鈴木 1998)。パリは、工業化によって豊かさを増す生活と、その生活に向かって開かれた芸術とが融合し、多分野に渡って多国籍の芸術家たちが自由に活動できる「芸術が都市に向かって開かれ、更に世界に向かって開かれた」(石倉・鈴木 1998, p. 906)都市として、活況を呈することになった。その進歩的な空気の下で台頭してきたのが、ドビュッシーやラヴェルを始めとする作曲家たちである。

彼らの多くはプロレタリアートの出身で、オリエンタリズムに深く傾倒した(MacKenzie 1995)。そして、全音階、五音階、旋法表現や非機能和声の援用、変拍子やポリリズムなどの有機的導入で、それまでのクラシック音楽に支配的だった因習を次々と破戒し、新たな響きの可能性を切り開いていった(Pomeroy 2003)。

少なくとも 19 世紀最後の 15 年から、20 世紀最初の 15 年まで、彼らと同時代を生きた作曲家たちは、大きく三者択一の選択を迫られることになったように思われる。第 1 の選択は、個々のスタイルの違いはともかく、彼ら「印象主義者」と同じく音楽表現の開拓者となる道であり、シャルル・ケ克蘭、アンドレ・キャプレ、フロラン・シュミット、ギュスターヴ・サマズイユらが追随した。第 2 の選択は、彼らとは音楽的に一線を画し、先人に倣って保守的な作風を保つことで

あり、ギュスターヴ・シャルパンティエ、ポール・デュカ、アルベリック・マニヤール、セシル・シャミナードらを挙げるができる。そして第 3 の(数の上では最も多かったであろう)グループは、新旧の音楽表現の間に空いた溝に戸惑いながらも折衷を試みた音楽家たちであり、ジョゼフ・ギ・ロパルツ、ポール・ラドミロー、エイメ・クン、ジョゼフ・カントループ、デオダ・ド・セヴラックらがいた。彼ら第 3 グループの多くは、音楽史に残る革命的な語法を編み出すことのない、コルネーダー(1995)の表現を借りるなら「群小作曲家」であった。その多くは、やがて地方の音楽大学へ赴任し、現地の民謡的な素材を自らの音楽表現のなかにとり込んで、いわば等身大の“地に足の着いた”音楽表現をめざすことになる。ロパルツはその後、パリを離れてストラスブールとナンシーの音楽院長を務め(Djemil 1967)、ラドミローはナント音楽院教授(Krier 2004)、クンはトゥルーズ音楽院長となり(Association Aymé Kunc 2010)、カントループは『フランス民謡大全 (Anthologie des chants populaires Français)』を著し(Smith 2004)、セヴラックはセレに戻った(Waters 2008)。この第 3 の流れの中に、本書の主人公クラスも含まれる。

クラスは今日でこそ作曲家としての再評価が進み、専ら音楽畑で語られるが、存命中はむしろ、アドリア海作戦の司令官を務めた軍人として知られ、生地プレストの海軍士官を長く務め、海軍准将にまで昇進した軍人としての認知度が圧倒的に高かった人物である。彼が 1917 年に発明したクラス式方位指示器(La Régle-rapporteur Cras)はフランス海軍に採用され、その学識を買われて 1925 年には海軍科学アカデミー会員にも迎えられている。

クラスが生まれた当時のプレストは、人口わずか 75,000 人ほどの小都市であったが、県立図書館に 25,000 冊の蔵書があったほど、港湾都市として、また地球・海洋科学の町として知的な空気に溢れていた。母はサロンをもち、夜な夜な演奏会や夜会が開催される、プレストでも最も音楽的な環境であったという(p. 59)。彼はそこを訪れる訪問客たちを通じて、音楽大学へ進むことなく演奏や作曲法を修得した。パリ音楽院への進学と、ローマ大賞の応募と受賞が作曲家としての名声を大きく左右した時代、彼の知名度が限られたものになったのも、無理からぬことであった<sup>3)</sup>。

彼は 1898 年の海軍学校卒業後、将校候補生として練習用の帆走クルーザー艦イフィジェニー号に乗船し、翌年 10 月までセネガル、西アフリカと北米へ赴任した(p. 61)のを皮切りに、軍属として各地を転戦・赴任す

ることになったが、そこから得た靈感を作品に反映させていた。また、1901年にパリを訪れた際、家族の知人の紹介でセザール・フランクの弟子アンリ・デュパルクと出会い、わずか三ヶ月の滞在中に深い友情をもつようになった。デュパルクは彼を指して「我が魂の子(Le fils de mon âme)」と呼んだという。デュパルクの勧めで、彼はスコラ・カントールムのヴァンサン・ダンディとアレクサンドル・ギルマンのクラスで聴講生となっており、彼の作風の基調をなすのも、デュパルクから吸収したフランク党のイディオムだった (pp. 71-73)。自らの旅行経験などを通じて得た靈感と、フランク党の流れを汲む後期ロマン派音楽の叡知の均衡のうえに、クラースの音楽は成り立っていった。

### Ⅲ. 本書について

本書は大きく2部に分かれ、前半はクラースの伝記的な記述に、後半は彼の作品解説に中心を置いており、評伝としては比較的オーソドックスな体裁といえる。

前者が176ページ、後者が361ページとやや後ろが重い、それでも彼ほど知名度の芳しくない作曲家に対し、150ページを超える記述が得られただけでも壮挙といわねばならないだろう。本書の最大の価値は、本書の完成を見ることなく、2007年に97歳で世を去ったクラース一家の最後の一人、モニク女史との直接交渉に成功し、彼女が保管していた全5巻の書簡集(ただし彼女の引き写しによる抜粋版)を入手したうえで、緻密な内容分析に基づいて、作曲者の実像に迫ろうとしたことであろう。それまでの評伝のほとんどが伝聞や作品評に留まっていたのに対し、本書のこの姿勢が、評伝としての価値を揺るぎないものにしている。逆にいえば、書簡集とクラース自身の未出版の自叙伝の引用が全体の多くを占める結果となり、それ以外の資料の裏づけは充分なしえていない。そこに、著者の苦労が偲ばれる体裁となっている。確かにドビュッシーやラヴェルら、資料が多く残されている作曲家の評伝に比べると、すっきりしない読後感はあるにはある。それでも、現時点で最高のクラースの評伝であることは疑いようがないであろう。

実際評者も、本書によって初めて知った事実が多々あった。例えば、かのヴィクトル・セガレンがクラースの従兄弟だったとの事実には大層驚かされ、今さらながらに彼がブレストの出身だったことや、ゴーギャンの跡を辿ってタヒチに棲んだ彼の経歴とクラースの前半生が鮮やかに交錯した (p. 57)し、一般的にドビュッシーの影響下にあるポスト・ロマン派と見なさ

れがちな彼が、自身ではほとんどドビュッシーの作品を評価していなかったことは全く予想外であった(p. 163)。他にも、自宅のピアノがデュパルクの寄贈であること(p. 170)、死に際して国葬扱いになり、多くの雑誌に特集が組まれたこと(pp. 181-182)、彼の作品に対し、アルフレッド・ブリュノーとルイ・オベールがかなり頻繁に講評を雑誌等に寄稿していたこと(pp. 529-533)、大作ともいえるピアノ協奏曲に対して、ピエール・フェルーやエミール・ヴェイエルモーズらの進歩的な作曲家や批評家たちが講評を寄せていること(p. 533)など、本書には多くの示唆が隠れており、フランス近代音楽を愛好する者としては目から鱗の落ちる思いであった。なかんずく作曲者自身が、巷で書かれているようにドビュッシーの音楽表現を評価していなかった点については、彼の音楽語法を音楽学的に解明する上で新たな研究課題を提示したともいえ、今後彼の「印象主義的な」書法の源泉がどこにあったのかについて、各方面からの研究の深化が求められよう。

### Ⅳ. おわりに

すでに述べたとおり、近代(フランス)音楽史において、ナショナリズムのレベルで近代化を語る論考は存在する一方、地方レベルで音楽におけるロカリティを探求した「群小作曲家」たちの営みを通じて近代音楽史を再定義し、以てツーリズム研究における新たな遺産観光のアトラクションとして生かそうとする試みは存在してこなかった。この問題は、彼ら第3グループの作曲家たちが、一般的な近代音楽史の中ではいわば“傍流”(Goldbeck 1974)にすぎないドビュッシーと、ワグネリズムやフランキズムと彼を折衷したに過ぎない「群小作曲家」(コルネーダー 1995)として、二重に退けられてきた状況と深く関わっているように思われる。

彼らの多くは、一面ではドビュッシーやラヴェルと後期ロマン派音楽の折衷様式をとったが、同時に各々の活躍の場で土着的な音楽的財産の価値をいち早く称揚し、採譜・蒐集・アナリーゼを通じて地域的多様性や独自性を見いだしていった存在でもあった。例えば、1910年に故郷セレへ戻ったセヴラックは、1907年にスコラ・カントールムで博士号を得た学位論文『音楽における中心化と各地の小さな礼拝堂 (La centralisation et les petites chapelles musicales)』で、音楽史におけるドイツ中心主義的傾向からフランス音楽を解放するための方法として、地方に眠る音楽的遺産に注目して脱

中心化を図るべきだと主張していた(Guillot 2004)。ツアーリズム研究の視座からは、彼らの試みはいわば音楽を通じた地域資源の再発見であり、音楽を通じた 100 年前の地域ブランディングの試みである。ハンガリー近代音楽の礎を築いたコダーイやバルトークがそうであったように、フランス近代音楽に豊かな地域的多様性を与えようとした彼らの営みを再評価しても良いのではないか。その意味で本書は、単なる一作曲家および軍人の評伝としてのみならず、より広いフランス近代音楽史の中で位置づけなおしたうえで読み直すとき、さらなる輝きをみせるだろうと思われた。

## 注 記

- 1) Butler の指摘は、メディア誘発型観光の文脈からは、映画と映画音楽とが、ともに観光行動を誘発(induce)する刺激として論じられるべきであり、その整理が充分でないことに対する批判であったとも考え得る。
- 2) その後、クラースの作品集は仏タンパニ(Timpani)による録音が進み、現在は管弦楽やピアノ曲、合唱曲集や室内楽の作品集が存在する。著者自身にもピアノ作品全集の録音計画がある。
- 3) ローマ大賞への応募が叶わなかったため、その後の評価に大きく影がさした作曲家は、ほかにモーリス・エマニュエル(保守的な恩師と確執したため、推薦を得られず断念)やルイ・ヴェイルマン(妻帯者だったため、応募資格を失った)がいる。

## 参考文献

- 石倉 誠・鈴木 一(1998): アール・ヌーヴォーにおけるエクトル・ギマールの考察. 日本建築学会近畿支部研究報告集: 905-908.
- 小林森夫・岡田和正・鈴木一(1992): アーツ・アンド・クラフツ・ムーブメントに見られるクラシック形のデザインについての社会的考察. 日本建築学会大会学術講演梗概集: 1243-1244.
- コルネーダー, ヴァルター: 中野博詞・樋口隆一・美山良夫訳(1995): 「西洋音楽史」全音楽譜出版社.
- 佐々木雅幸(2001): 創造都市の公共政策—2000年のボローニャ. 政策科学 8(3): 279-300.
- 島田賢一・川向正人(2004): フランスの近代インテリア成立過程. 日本建築学会学術講演梗概集: 67-68.
- ジル・ハミルトン・ペニー・ハート・ジョン・シモンズ: 鶴田 静訳(2002): 「ウィリアム・モリスの庭—デザインされた自然への愛—」東洋書林.
- 鈴木晃志郎(2009): メディア誘発型観光の研究動向と課題. 日本観光研究学会全国大会研究発表論文集 24: 85-88.

- 中山修一(2000): アーツ・アンド・クラフツから近代運動へ. 神戸大学発達科学部研究紀要 7(2): 173-188.
- 西沢昭男(1972): ドビュッシーの和声法について: そのカデンツの変容と崩壊. 横浜国立大学教育紀要 12: 110-123.
- 安田 香(2003): ドビュッシーの 1890 年前後の作品におけるガムラン・モチーフの扱いについて—ドビュッシーとガムラン 楽曲分析篇 2—. 岐阜聖徳学園大学紀要. 教育学部編 42: 37-51.
- 矢部賢一(2005): 体験される農村—ポスト生産主義の視点から—. 日本村落研究学会(編): 「消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」(村落社会研究 41)」. 農産漁村文化協会: 41-66.
- Association Aymé Kunc (Accessed: 2010. 01. 14) <http://www.aymekunc.fr/>
- Atkinson, C. (1997): Whose New Orleans? Music's place in the packaging of New Orleans for tourism. In S. Abram, J. Waldren and D. Macleod (eds.) *Tourists and tourism: Identifying with People and Places*. Oxford, Berg Publications: 91-106.
- Brown, A., O' Connor, J. and Cohen, S. (2000): Local music policies within a global music industry: cultural quarters in Manchester and Sheffield. *Geoforum* 31(4): 437-451.
- Butler, R.W. (2006): Music and Tourism: On the Road Again By Chris Gibson and John Connell. Channelview Publications 2005, viii+301 £24.95 Pbk. ISBN 1-873150-92-X. *Annals of Tourism Research* 33(2): 583-585.
- Djemil, E. (1967): *J.Guy Ropartz ou la recherche d'une vocation*. Imprimerie Jean Vilaire: Le Mans.
- Duchesneau, M. (1997): *L'avant-garde musicale à Paris de 1871 à 1939*. Sprimont: Pierre Mardaga éditeur.
- Grazian, D. (2004): Opportunities for ethnography in the sociology of music. *Poetics* 32: 197-210.
- Gibson, C. and Connell, J. (2005): *Music and Tourism*. Channel View Publications.
- Gibson, C. and Connell, J. (2007): Music, tourism and the transformation of Memphis. *Tourism Geographies* 9(2): 160-190.
- Goldbeck, F. (1974): *Twentieth century composers 4: France, Italy and Spain*. London, George Weidenfeld and Nicolson.
- Hollinshead, K. (1988): First-blush of the Longtime: the market development of Australia's living Aboriginal heritage. *Proceedings of the Annual Conference of the Tourism Research Association* 19: 183-198.
- Kong, L. (1995): Popular-music in geographical analyses. *Progress in Human Geography* 19: 183-198.
- Krier, Y. (2004): Ladmirault, Paul (Emile). In Sadie, S. (ed) *Grove music online*. Oxford University Press.

- MacKenzie, J.M. (1995): *Orientalism in Music*. Manchester and New York: Manchester University Press.
- Pomeroy, B. (2003): Debussy's tonality: a formal perspective. In Treize, S. (eds.) *The Cambridge companion to Debussy*. Cambridge University Press: 155-178.
- Smith, R.L (2004): Canteloube (de Malaret), (Marie) Joseph. In Sadie, S. (ed) *Grove music online*. Oxford University Press.
- Waters, R.F. (2008): *Déodat de Séverac: Musical identity in Fin de Siècle France*. Burlington: Ashgate Publishing.

(投稿 : 2009 年 12 月 16 日)

(受理 : 2010 年 1 月 14 日)